

Title	カウィ語におけるサンスクリット要素
Author(s)	崎山, 理
Citation	大阪外国語大学学報. 19 p.97-p.108
Issue Date	1968-06-25
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80316
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

カウゝ語におけるサンスクリット要素

崎 山 理

Les éléments sanscrits en vieux-javanais

Osamu Sakiyama

Le vieux-javanais s'appelle aussi le kawi, parce qu'il contient tant de mots sanscrits qu'on l'a considéré comme une des langues vulgaires qui ont dérivé du sanscrit ou du pali jusqu'au moment où W. von Humboldt a eu démontré que le kawi est une langue qui fait partie des langues malayo-polynésiennes. Cette appellation "kawi" qui a été donnée pour la langue vieux-javanaise a naturellement son origine dans le mot sanscrit "kavi-" (poète) et depuis lors ce mot là avait causé un malentendu chez beaucoup de savants.

Cet article a pour objet d'abord de montrer les mots empruntés du sanscrit en kawi (l'auteur emploie Ādiparwa, Mahābhārata Ire comme matériaux) ; quoique le caractère du kawi provienne de celui du pallava sud-indien, les mots empruntés ne sont pas du pali tel qu'on les voit dans les langues birmane, siamoise etc. En outre de cet emprunt lexique, il est plus important au point de vue stylistique que le kawi introduit à son noyau linguistique les formes grammaticaux ou "les outils grammaticaux" du sanscrit ainsi qu'il suit: 1. Sandhi. Excepté -n+k->-ngk-, la plupart du sandhi à l'égard de la voyelle en kawi suit celui du sanscrit. 2. Affixe. upapira (<upa(Sk.)-pira (Kw. combien)) "payer", pracakah (<pra(Sk.)-cah (Kw. pièce)) "diriger vers" etc. Il y a quelques exemples qui appliquent des affixes sanscrits pour des lexiques du kawi, mais en comparaison des lexiques sanscrits avec ses affixes qui ont été directement empruntés en kawi, ils ne sont pas si nombreux. 3. Féminiser le nom masculin. Bien que ce ne soit pas utilisé dans le lexique du kawi, voici quelques exemples; priya "amoureux": priyā "amoureuse", putra "fils": putrī "fille". 4. Conjonction, préposition et adverbe empruntés.

De plus, par suite de la touche du kawi au sanscrit il en résulte que le kawi abuse du grammaire sanscrit ou le substitue à la manière du grammaire du kawi. Par exemple, on confond a-(Sk. préfixe négatif) avec a-(Kw. préfixe verbal et adjectif, dérivé de *(m)a- dans

les langues malayo-polynésiennes) ou bien sa- (Sk. préfixe avec le sens de la possession, de l'association et de la ressemblance) avec sa- (Kw. préfixe des numéraux, un, tout, dérivé de *-t'a). Par conséquent, afin de distinguer lequel est l'usage exact il est impossible dans la plupart des cas de ne pas dépendre d'un contenu dans chaque phrase, cependant on trouvera même la phrase qu'on peut interpréter de deux façons,

bhagawān Byāsa sira pinakamanggala *saḥyāsa* ring sabhā “Ermite Byasa comme directeur *a suivi la loi* dans cette assemblée” ou “Ermite Byasa est devenu directeur pour *toute la loi* dans cette assemblée”.

Enfin, l'auteur indique comment la confusion se produit dans un ordre des mots en kawi influencé par le sanscrit, à savoir, quoique l'ordre des mots fondamental en sanscrit dont le modificatif se pose avant ce qui est modifié soit renversé en kawi comme il est commun dans les langues malayo-polynésiennes, ces deux ordres des mots se présentent en kawi non seulement pour les lexiques du sanscrit mais aussi pour ceux du kawi.

Il se peut que de tels éléments sanscrits jouent des rôles importants pour donner au kawi la forme d'expression vivante et spirituelle, mais ils n'arrivent pas à changer le caractère fondamental du kawi. Il est évident aussi du fait que le javanais moderne n'hérite point de pareilles formes grammaticaux du sanscrits à l'exception du lexique.

I. カウィ語とは古代ジャワ語ともいわれ、現代ジャワ語の母胎となった言語である。⁽¹⁾その最古の例は Sumatra 島 Palembang 近くの Kedukan Bukit で得られた西暦683年の碑文に既に現われているが⁽²⁾、南インド系の Pallava 文字が起源といわれるその文字もやがて発達してカウィ文字となり、更に殆んど文字上の変形もなく現在のジャワ語、バリ語文字として使用されるに至っている。碑文の時代を過ぎると共に文学時代が始まるが（この時代にも碑文は多々存在する）、夫々の残された作品の言語的特徴によって Rāmāyaṇa, Mahābhārata の二大文学を含む「古期」（9～15世紀、即ち Madjapahit 王国の壊滅まで）と「中期」（15世紀のイスラム教の本格的進出から18世紀末まで）に分け、それ以降を「新期」と大まかに区別するのが普通である。⁽³⁾さて683年の碑文においてそこに書かれた言語はカウィ語であるにも拘らず、サンスクリット要素が数多く認められる。インドネシアへ何時頃からインド人の渡来があったのかは詳らかではないが、紀元一世紀にはインドの都市形成法に倣った都市が存在していたこと、その王がサンスクリット名を持っていたことなどから紀元初期には既にインド人の移住があったと考えられる。⁽⁴⁾又、カウィ文字が Pallava 文字の系統であるとせられているにも拘らず、そのもたらされた言語はサンスクリットであって他の東南アジア諸国に仏教聖典と共に伝わったパーリ語ではない。これはヒンドゥー教を信奉するインド東南部の Pallava 王朝が紀元一世紀頃南海における植民地の一つとしてジャワをも持っていたという史実に基くのであろう。⁽⁵⁾例えば先に掲げた Kedukan Bukit 碑文の最初の部分を示して見よう。

çri çakawarsātita 605, ekādaçī çuklapakṣa wulan Waiçākḥa < 釈迦紀元は605年, 即ちワイシヤカ期 (現代の4~5月に相当) 第11の半月になった > この文の中でカウイ語本来の語彙は tita < 経過する >, wulan < 月 > のみで, その他は凡てサンスクリット語彙にそのまま当り,⁽⁶⁾ 音韻の平滑化現象を起したパーリ語には当らない (文中の語彙では warṣā, ekadaçī, çuklapakṣa 等々, パーリ語では vassa, ekārassa, sukkapakka であるべき)。このことは後の文学時代の作品についていえることであって, カウイ語におけるパーリ語の痕跡は全く認められない。

sāyuta < 一万 > (I. 22)⁽⁷⁾ < サンスクリット ayuta-; パーリ dasa-sahassa⁽⁸⁾

tri bhuwana < 三界 > (IV. 8) < tri-; ti-

cakra < 環 > (X. 33) < cakra-; cakka-

等々も明らかにサンスクリットに対応している。しかるにカウイ語の持つサンスクリット的特徴は W. von Humboldt がカウイ語をインドネシア語派に属する一言語であることを言明するまで,⁽⁹⁾ 彼以前の幾多の研究者をしてカウイ語をあたかもサンスクリット, パーリ語と同系統の特殊な詩的言語であるかの如く見誤らせていたのであった。⁽¹⁰⁾

II. Raffles. etc. の研究者に誤解させたようにカウイ語の中のサンスクリットからの借用語は確かに多い。それはカウイ語の延長としての現代ジャワ語・インドネシア語についてもいえることであって数え上げれば際限がないが, インドネシア語の日常語彙, 例えば suka < 好む >, muka < 顔 >, sama < 同じ >, kata < 言葉 >, kerdja < 仕事 > 等々, それがサンスクリットの sukha-, mukha-, sama-, katha-, kārya- が語源であることなど一般人には最早意識すらされていない。⁽¹¹⁾ 又, 現在, 事に応じて作られるスローガンの類は特に意識的にサンスクリットから引かれることが多い。pantja sila < 五原則 >, dasa warsa < 十周年記念 >, swadesism < 自給自足主義 > 等々。カウイ語中のサンスクリット語彙は, 現代, 既に廃れたり, 他の語によって置換えられたりしたものも多い。現代ジャワ語で見ると,

カウイ	サンスクリット	Ngoko < 下級語 >	Krama < 上級語 >
adya < 今 >	< adya- →	saiki	: sapunika
hetu < 理由 >	< hetu- →	sabab	: sabab ⁽¹²⁾
go < 牛 >	< go- →	sapi	: lembu
phala < 果物 >	< phala- →	woh	: woh

又, カウイ語にも存在し, Ngoko, Krama のいずれかに残されてこの両語の使分けに役立たせている場合もある。

カウイ	サンスクリット	Ngoko	Krama
gaja(h) < 象 >	< gaja- →	gadjah	: liman
toya < 水 >	< toya- →	banju	: toja
pakṣi < 鳥 >	< pakṣi- →	manuk	: peksi

更に, 現代ジャワ語でカウイ語から受継いだサンスクリット語彙を語中, 語尾の音韻交代 (Ng. と Kr. とを区別する一つの一般的な方法) にまで押進めている例も存在する。

カウィ	サンスクリット	Ngoko	Krama
guha, giha<洞穴>	<guha- →	guha	: giha ⁽¹³⁾
oṣadhi<薬>	<oṣadhi- →	usada	: usadi
carita<物語>	<carita- →	tjarita	: tjarios

いずれにせよ、サンスクリット語彙の持つ意義、音韻はそのままカウィ語にも保たれている。⁽¹⁴⁾

Ⅲ. カウィ語においてサンスクリットの占める多数の語彙は、それらの語彙を語幹としてカウィ語の文法に従わせ（即ち、接頭、接中、接尾辞を附して）名詞化、動詞化することになるが、この場合は単なる借用語の問題にしか過ぎない。しかしながらこれとは別にサンスクリットの文法要素をもカウィ語の中に取込んだ形で現われる場合がある。それはあたかも日本語の中に漢語の語彙のみならず文法形態をも借用した方法を思わせる。⁽¹⁵⁾ 語法までも取入れたことには、それなりの文体論的な配慮のあったことが予想され、サンスクリットの持つ統辞法の簡潔さによって表現に一層の効果を与えようとしたともいえるであろう。以下本稿ではそのような現象を取上げようとするのである。

1. Sandhi<連声>。^{レンジョフ}カウィ語における連声の方法はサンスクリットの規則を凡て含むのではない。即ち以下に示すような母音間の場合にのみ起るのであって（但し、サンスクリット由来の否定を表わす接頭辞 nir- が次に来る子音によって nis-, niç-, 同じく dur- が dus-, duh- となり、又、存在を表わす接頭辞 as- が aṣ- となるような僅かの例が伝わっているが、これらはそのような連声をした形のままでサンスクリットから伝わったのでカウィ語で活用される連声とはいえない）サンスクリット起原の語彙間のみならずカウィ語本来の語彙の間にも及んでいる。カウィ語文法では sandhi dalam<内連声>（語幹に接頭、接尾辞がつく場合）、sandhi luar<外連声>（二語の連結の場合）とサンスクリット文法に倣って分けてはいるけれども、その連声の起り方は同じである。

i. a+a, a+ā, ā+a, ā+ā>ā.

salawas nirān (<nira-an) siniwi (X.19)<永遠に彼は尊敬される>

同じく, i+i, i+ī, ī+i, ī+ī>ī.

u+u, u+ū, ū+u, ū+ū>ū

ii. a+ē>a, i+ē>i, u+ē>u, ö+ē>ö.

rěngön (<rengō-ēn) ike wuwus mami (X.35)<私の言葉を聞かれよ>

iii. a+u>o, a+i>e.

mojar (<ma-ujar) ta sang prabhu (X.22)<王は語られた>

iv. u, o, ö がそれ以外の母音（ēを除く）の前で w となる。

ya tāngalilirana kaḍatwan (<ka-datu-an) haji (X.29)<彼が王国を継ぐであろう>

v. i がそれ以外の母音（ēを除く）の前で y となる。

kadi swabhāwa ning angunyakēn wedamantra (X.21)<ヴェーダの祈呪を唱える行為のように>

これらの母音にしか起らない連声がサンスクリットの連声方法を借用したものなのかどうか今それを詳らかにすることはできない。但し、カウゝ語において語末の -n が次に来る語頭音 k- の前で -ng に変化することが多いのは、サンスクリットにはない連声の例である。

kawēdihangku (<ka-wēdih-an-ku> <私の怖れ>

2. Affixation<接辞化>。サンスクリットの動詞語根に附される接頭辞及び名詞と共に用いられる接尾辞の多くがカウゝ語にも流用されている。

i. upa-<の向って><upa-。カウゝ語 upamā<例>はサンスクリットからそのまま借用したものであるが(<upa-√mā 測る), カウゝ語に取容れた例として upapira (<upa-pira<幾程>> <払う>がある。⁽¹⁶⁾ 又, カウゝ語で活用したサンスクリット借用語として,

inuparēngga⁽¹⁷⁾ ring nadī çuci nirmala (X.19)<清浄な川で飾られて>

ii. nir- nis-, niç-, dur-, dus-, duç-, duh-<否定接頭辞><夫々該当のサンスクリットから。これらの接頭辞はサンスクリットの語彙と共に複合した形で借用されている場合が多い。

anguyup ta sira wwe ning samudra asat nirawaçesa⁽¹⁸⁾ (VI.32)<彼は海水を干上って残りがなくなるまで飲んだ>

但し, カウゝ語と共用された nirdon<方向のない→無駄に>⁽¹⁹⁾の如き例が存在する。とはいえ, カウゝ語本来の語彙に対して用いられることは稀で, その場合 ta-, tar-, tan- というカウゝ語独自の否定辞をもってする。

syapa ngaran ira mpu sang tamolah (<ta-ma-ulah<動かない>)ikeng patapa ngke(X.22)
<この庵に住んでいるお方は誰か>

tarpamangan (<tar-pa-pangan) sadākāla (V.5)<ずっと食べない>

iii. pari-<の回りに><pari-。サンスクリットののままの複合形を活用した例として,

kāri tang rare pinariwr̥tta⁽²⁰⁾ning manuk (X.27)<その赤坊は留り, 小鳥に取囲まれた>
の他に, parikas⁽²¹⁾<至極硬い>の如くカウゝ語の kas<硬さ>に附く場合もある。

iv. pra-<の前に><pra-。サンスクリットの複合形も多い。例えば,

tan hana wruh i pracarangku⁽²²⁾ (X.36) <私の行い (←道)を知っているものはいない>
pra- がカウゝ語に附いた例も次の如く見出される。

ya mamatuk hayuyu mragagah (<pra-gagah)⁽²³⁾magōng<彼が強くて大きい蟹を突刺した>
prapañca pracacah⁽²⁴⁾ pañca<プラパンチャ (人名)は (即ち情熱は)友人に対して向けられた>

cacah は<切片>のことでありその用例は多い。その他 amrakatak (<a-pra-katak?)⁽²⁵⁾<荒々しく扱う>は katak の他の用例に行当らないけれども (又, 現代ジャワ語にもこの語に対応する言葉がない), カウゝ語自体には pra- という接頭辞がないことから恐らく早くに廃れたカウゝ語語彙であったと思われる。

v. abhi-<の向って><abhi-。サンスクリット複合語の文例。

sahasāmangan abhiprāyanya⁽²⁶⁾<彼の意図は凡てのものを食べる (←持つ) ことだ>

カウィ語に附加された例は *abhikutak*〈呼起す〉⁽²⁷⁾がある。但し、*kutak* についても上例と同様に他の用法が見当らず、現代ジャワ語に比定し得る語も見出せない。

vi. *su-*〈美称を表わす接頭辞〉〈*su-*。サンスクリットと共に用いられた例。

sutirtha⁽²⁸⁾*wenya mahëning* (X.19)〈清浄な水〉

カウィ語にも適用せられた例。

ikanang ranu masurawayan (〈*ma-su-raway-an*) *lawan tasik*⁽²⁹⁾〈海に流れるその湖〉

raway〈垂れる〉は *su-* を伴わず用いられる場合も多い。

vii. その他 *swa-* 〈自身〉〈*sva-*, *sarwa-*〈凡ての〉〈*sarva-*, *sam-*〈共に〉〈*sam-* 等々はサンスクリットから複合形そのままの形で借用された例は存在するが、カウィ語にそれが用いられた例は見当らない。

次に接尾辞に関しても、サンスクリットから原形のまま借用された語が凡てを占め、カウィ語に附けられた例は存在しない。例えば *-wan*, *-wati*, *-man*, *-in* 〈所有を表わす接尾辞〉⁽³⁰⁾などの他、*-ka*〈縮少又、意味を弱める意を表わす接尾辞〉⁽³¹⁾が見られるが、いずれにせよカウィ語の中で生きて使われた接尾辞ではない。

3. 男性名詞の女性名詞化。カウィ語は品詞に性を持たない言語であるけれども、場合によっては職名、地位などにその区別をする必要が出てくる。しかしサンスクリットのように語尾変化によってそれを示すのではなくて、その必要があれば〈女性の〜〉という語を付して示すのがマライ・ポリネシア語族に共通の始原的な方法であった。⁽³²⁾ サンスクリット起原のカウィ語に見られる女性名詞形成法は次のように現われるが、いずれもサンスクリット語彙についてのみである。

i. *-a* : *-ā*。 *Menaka* : *Menakā* (X.24)〈メナカ (女性名), *priya* : *priyā*⁽³³⁾〈恋人〉

ii. *-a* : *-ī*。 *widyādhara* : *widyādhari*⁽³⁴⁾ (X.22)〈天女〉, *ora saputra* (X.39)〈自分の息子ではない〉 : *putri*⁽³⁵⁾〈息女〉

iii. *-i* : *-ī*。 *swāmi* (X.34)〈夫〉 : *swāmī* (X.40)⁽³⁶⁾〈妻〉

4. 接続詞、前置詞、副詞の類の借用。サンスクリットの *ca*〈そして〉, *saha*〈と共に〉, *ati*〈(+副詞, 形容詞) 非常に〉, *aty-anta*〈非常に〉等がカウィ語にも借用されている。又、カウィ語にはサンスクリットの如き格変化が存在しないから、例えばサンスクリットでは *saha* の後で起る格支配の問題など全く存在しない。

wruh ring inggitaceṣṭyākāra⁽³⁷⁾ (VIII.16)〈意向と希望とを知る〉

pināṇigrahaṇa ta sira saha widhiwidhāna (V.12)〈必要な儀式を執行って彼は結婚させられた〉

hana ta prāsāda atiçaya ruhurnya (VIII.8)〈その高さが異常な (位高い) 塔があった〉

atyanta kënoh ning ulah sang nāginī (V.18)〈雌龍よ, (お前の) 行いの何と適わしいことよ〉

atyanta rāmya nikā dening sarwa kusuma (X.20)〈凡ての花で (飾られて) 非常に美しい〉

IV. 以上のようにサンスクリットの音韻、語法が比較的そのままの機能でカウィ語にも受容れ

られているにも拘らず、もともと二種の系統の異った言語の接触によって引起された結果として、カウィ語におけるサンスクリット文法の誤用或いはカウィ語化が見られる。例えば、サンスクリットの接頭辞 a は〈否定〉を意味し、⁽³⁸⁾ そのままの機能を持ってサンスクリットの複合語と共にカウィ語にもはいっている。

aneka⁽³⁸⁾〈種々の〉

asambhawa⁽³⁹⁾〈不合理な〉

しかし一方でマライ・ポリネシア語族を通じて存在する語幹についてそれを動詞化(形容詞化)する接頭辞 *(m)a-⁽⁴⁰⁾、カウィ語では a-, ma- で現われる接頭辞がサンスクリットの a- と混同され、サンスクリット起原であるにも拘らず、逆に名詞化する目的でその a- を落してしまう現象が見られる。(謂ゆる metanalysis〈異分析〉の現象。)

amërta⁽⁴¹⁾→mërta〈甘露〉となる如く。

又、次の例のように a-+ サンスクリット語彙における a- を上記のカウィ語的な用法によって活用している。

tan hana sire mpu tãpasa, asepi tang açrama……anon ta sira strĩ paripũrñeng hayu, kadi widyãdharĩ manurun aswãgata⁽⁴²⁾ (X.21, 22)〈隠者は居らずその庵は帷かだった……まるで天女が歓迎するために天下りしたかのような申し分なく美しい女性を彼は見た〉

amalaku aswãmĩ uttama (XVI. p. 57)〈最良の妻を娶ることを乞う〉

sãjnã haji⁽⁴³⁾ (X.22)〈閣下のお考と一致して(単に高貴の人に対する呼掛けの言葉として用いる)〉

tan hana kurang ing lakṣaṇa, uměntyakěṇ sãçrĩ⁽⁴⁴⁾ mahãrãja rūpanya (X.39)〈(彼は王としての) 振舞において不足しているものとてなく、王の凡ての名声をも失わせる程だ〉

カウィ語の a- とサンスクリットの a- とは文章の内容を良く吟味して意味的弁別を行わなければならない。このカウィ語の a- について、サンスクリットの語頭の二重子音連続を避けるために二音節に引離す方法として anaptyxis〈剰音発生〉と見る説もあるが、⁽⁴⁵⁾ a- の用例からいっても又サンスクリットの語頭に二重子音を持つ語彙に対する現れ方からいってもそのように考えるべきではない。

次に、サンスクリットの接頭辞 sa- についても同様の問題がある。sa- は〈結合, 所有, 共通, 類似〉等を示す概念を持つのに対し、一方、カウィ語にも接頭辞 sa- があり、マライ・ポリネシア語族においてその共通祖語を *t'a と推定され得る〈一〉を表わす語に由来する。⁽⁴⁶⁾カウィ語の sa- においては〈一〉の意味の他〈一つにまとまったこと→凡て, 全〜〉の如き〈全体〉を示す意味ともなり、サンスクリットの sa- (+名詞くと共に、を従えて、と同じものを持って)とは意味的な対立がある。この両者の区別は文章に従って行わなければならない場合も多く、

bhagawã Byãsa sira pinakamanggala sabyãsa ring sabhã (VIII.12)〈ビヤサ仙は指揮者としてその集まりにおける掟に従った〉又は〈ビヤサ仙はその集まりにおける凡ての掟の指揮者と

なった〉

の例の如く、両方に意味が取れる場合もあるが、この区別が明らかである例も無論存在する。

前二例はサンスクリット、後一例はカウィ語の用法。⁽⁴⁷⁾

t'agawe ko sukamanggala saparikrama ning wiwaha (XV. p. 47)〈結婚式と共に喜悦幸福の儀式を行え〉

masö sopacāra⁽⁴⁸⁾ (XV. p. 53)〈近づき(ながら)進む〉

asing sasambhawa⁽⁴⁹⁾ parananya (XVI. p. 61)〈その方角が(訪れられ得る)各々の凡ての場所〉

V. 最後に語順について考察して見よう。サンスクリットにおいては、各語の持つ格変化によって各語の機能が明示されるから、厳密な意味での語順というものとは存在しない。しかし修飾語、被修飾語の関係においては修飾語が被修飾語の前に置かれるのが一般的な原則であって、カウィ語の修飾語が被修飾語の後に来る形式とは異っている。カウィ語文法では前者を〈MDの規則〉、後者を〈DMの規則〉と称え、⁽⁵⁰⁾ サンスクリットの影響を多面に亘って受けているカウィ語にはこの両規則が並存する。まず、〈MD〉に従うサンスクリットからの借用語彙として、

uttamajanma⁽⁵¹⁾ ta kari kita sang tāpinī (X. 29)〈女隠者よ、汝こそ高貴の生まれ(の人)である〉

に対して〈DM〉の例は次のようになる。

ndyānug prastāwa ning mohita kadi malupeng janmottama kita⁽⁵²⁾

〈汝が高貴の生まれであることを忘れたような困惑の原因は何か〉

このようなくDM〉の例は、たとえ語彙はサンスクリット由来であっても、その文法形式はカウィ語に従わせたのである。しかし一方においてカウィ語本来の語彙を〈MD〉に則って表現した例も存在する。

göng krodha⁽⁵³⁾ (VIII. 21/X. 92)〈非常に(大いに)怒る〉

次に上に述べた如き例を若干示す。

minantra nira taya waidya sarpawisosadha⁽⁵⁴⁾ (VIII. 11)〈彼は蛇毒剤(を用いて)呪文をかけられた〉

sira ta wruh ring mantrosadha sarpabiṣa (VIII. 8)〈彼は蛇毒剤の呪文を知っている〉

yatanyān wehana mās maṇi rājayogyā⁽⁵⁵⁾ (VIII. 8)〈最高に素晴らしい(←王の持つに相応しい)金、宝石が与えられるよう〉

yogyā ta kita binihajyangku (X. 29)〈汝が私の后となることは適当だ〉

この最後の例では bini〈女、妻〉, haji〈王〉が二語ともカウィ語本来の語彙であり、〈DM

の規則にも従っている。サンスクリットによって影響されない最もカウイ語的な姿を保った例といえる。

さて、上に見てきたようにカウイ語におけるサンスクリット要素の出現は多方面に亘る。しかしそれが語彙面での借用にのみ終って形態面では殆んど大きな影響をもたらさなかったことは、その独自の文学上の雄大なスケールとも裏腹をなす点であろう。その作品は殆んどジャンルに亘るインド起原のものが多いけれども、単なる翻訳として伝えたのではない。更にカウイ人自身の手になる大著 *Nāgarakērtāgama* (西暦1365年, Prapantja の作), *Nitisastra* (Madjapahit 王国末期, 15世紀末頃) *Pararaton* (同じ頃) 等も注目すべき作品であり、文学史上からもカウイ文学が再確認されなければならないと思われる所以である。

註

- (1) カウイ語即ち古代ジャワ語ではなく、カウイ語は古代ジャワの詩人によって用いられた言語であって古代ジャワ語の一部分をなすに過ぎない (I.G.K. Ranuh: *Çakuntalā I*, Singaradja, p.3) という意見もあるが、本稿では通称に従う。Kawi はサンスクリットの kavi-〈詩人〉に由来する。この名称が後述するようにカウイ語に対する誤解を生ぜしめた面もある。
- (2) G.Coedès: *Les inscriptions Malaises de Çrivijaya*. BEFEO 30, 1930, p. 33~37.
- (3) R.M.Ng. Poerbatjaraka & Tardjan Hadidjaja: *Kepustakaan Djawa*, Djakarta, 1957. 尚、カウイ語には *Rāmāyaṇa* は韻文形式で、*Mahābhārata* は散文形式で伝えられているが、サンスクリットの直訳そのままではなく、幾多の改作、改訳が見られ、形式も内容も異にする部分が多い。
- (4) Prijohutomo: *Sedjarah Kebudayaan Indonesia II*, Djakarta, 1953, p. 17. Prijohutomo は特に例を掲げてはいないが、中国側の最古の資料として後漢書卷6本紀、卷116西南夷伝に見える「葉調王便」を *Yawadwipa* (ジャワの古名) 王 *Warman* と解釈する Pelliot などの説に従っているのである。年代は永建6年(西暦131年)のことである。
- (5) 李長伝: 南洋史綱要。今井啓一訳: 南洋史入門, 東京, 昭和17年, 138頁。
- (6) サンスクリットの *v-* は、カウイ語で凡て *w-* と書かれる。又、*vy-* は *by-* と書かれる。
- (7) 以下本稿の引用例は、特に註記するもの以外、凡て *Mahābhārata* の第1部 *Ādiparwa* からのものである。カウイ語の *Mahābhārata* は Kēdiri 国王 Darmawangça の勅命により990~1006年に成ったといわれる。本稿で用いる *Ādiparwa* は1906年の H.H.Juynboll 校訂本に基づくインドネシア政府文化教育省 Jogjakarta 言語部会本である。1958年刊二冊。Vol. 1については章、節の区分けがあるから (I, 1) の如く、Vol. 2 は章のみで節分けがないので (XIII, p. 1) の如く示す。
- (8) *sāyuta* は *sa-ayuta* の Sandhi (後述) で *sa-* は〈一〉のこと。
- (9) W. von Humboldt: *Über die Kawisprache II*, Berlin, 1838.
- (10) 例えば, T.S. Raffles: *The History of Java Vol. I*, London, 1817, p.367. 彼によれば、カウイ語、パリー語はサンスクリットから崩れて出来た言語であるとしている。
- (11) この例中のように帯気音を無気音に代えるのもそうだが、サンスクリット語彙をインドネシア語風に

- 変化させた例も存在する。tetapi, tapi<然し><tathāpi は tetapi の te- を語頭音重複とみなして tapi をも生ぜしめ, pertama<第一の><prathama- は接頭辞 per- への類推によるもの, 等々。
- (12) Karana<理由>も Ngoko, Krama とも使用する。これはサンスクリット Kāraṇa- より。
- (13) 現代ジャワ語の敬語表現の中にはもう一つ Madya<中級語, 対等語>がある。いずれにせよカウイ語には見られなかった現象であり, カウイ語と現代ジャワ語との間の大きな断裂といって良い。しかしカウイ語においてこの例のように guha, giha の二形が Ablautung <母音交替の現象>として現われていることは, 現代の敬語発生解明への何らかの手掛りとなるかも知れない。
- (14) サンスクリットの持つ意義が現代ジャワ語において変化した例として Ng. merga : Kr. mergi<道, 方法, 訳>がある。サンスクリットの mr̥ga-<動物, 鹿>の意から<(動物の通る)道>へと変化した。但し, カウイ語の mr̥ga の意味はサンスクリットのままである。
- (15) 「不死の」「不可」「非常な」のような否定形, 「脱帽」のような動詞+目的語形はいずれも漢語的な文法形態を借用したもの。
- (16) Wangbang Wideha, I. 28.
- (17) サンスクリット upa-rāṅga-<色>より。
- (18) サンスクリット nir-ava-√śis<残りなく>より。
- (19) Sutasoma.
- (20) サンスクリット pari-√vrt<廻らす>より。
- (21) Bhomakāwya, LXXIII. 17.
- (22) サンスクリット pra-√car<進む>より。
- (23) Rāmāyaṇa, XXV. 58. mra- は pra- の音韻変化で名詞を動詞化(形容詞化)する機能がある。尙, gagah は現代ジャワ語で gagah (Ng. Kr.)<強い>。又, カウイ語にも anggagah<抵抗する>(Bhāratayuddha, XXVII. 2. の例がある。
- (24) Nāgarakṛtāgama, 96. 1. この問題のある文章に対しては, Th. Pigeaud : Java in the 14th century —The Nāgara-Kṛtāgama by Rakawi, Vol. IV, The Hague, 1960, pp. 339~340の解釈に従う。故にこのN. の著者名 Prapañca には<情熱>の意がかけられてあり(カウイ語ではサンスクリットの意味<拡大>では用いられない), pañca を kañca (現代ジャワ語 kantja (Ng. Kr.)<友人>)とみなす。
- (25) Rāmāyaṇa, XXIV. 130.
- (26) サンスクリット abhi-prē (√i)<意図する>より。
- (27) Smaradahana, XXI. 4.
- (28) サンスクリット su-tīrtha-<神聖な水浴場>より。カウイ語ではサンスクリットの tīrtha-<道, 浅瀬, 水浴場>を<川, 水>の意味で用いる。又, この文例では sutīrtha- と全く同意のことを更にカウイ語で繰返している。このような文体をカウイ語文法では Čloka と名附ける。
- (29) Nāgarakṛtāgama, 22. 2.
- (30) Himawānpāda (X. 19)<雪(を有する)山の麓>, talaga Kumudawati (Tantri Kāmandaka,[40]. p.112)<赤蓮(を有する)湖>, Hāstina pura (X.38)<手(を有する)者の国→象国>。これらはいずれもサンスクリットの -man, -vati, -in を由来的に含む。但し, サンスクリットの -vat (男性名詞を作る) : -vati (女性名詞を作る) の区別は, カウイ語において -wan : -wati として現われ(カウイ語

では品詞の性の区別は存在しない。形の上だけのことである), 現代インドネシア語にこの接尾辞が受継がれて職業における性の区別をするのに用いられている。sukarelawan〈義勇兵〉: ~wati〈女〉, hartawan〈百万長者〉: ~wati〈女〉等々。

(31) raksaka (X.42)〈庇護者〉

(32) 現代インドネシア語で, 例えば anak laki-laki〈男の子〉: anak perempuan〈女の子〉。但し, この他に以下に述べるサンスクリット由来の語末母音交替による方法を取る語も存在する, pemuda〈若者〉: pemudi〈女の〜〉, plontjo〈新入生〉: plontji〈女の〜〉等々。

(33) サンスクリット priya-〈愛しい〉より。

(34) サンスクリット vidyādhara-〈妖精〉より。

(35) サンスクリット putra-〈息子〉より。

(36) サンスクリット svāmin-〈主人, 夫〉に svāmi は由来する。カウイ語においてこの語末の -i を -ī にして女性名詞化する現象は ii. の analogy〈類推〉であろう。尙, 現代インドネシア語には -ī の形は伝わらず, swami〈夫〉: isteri〈妻〉となる。

(37) サンスクリット iṅta-ca-īṣṭi(〈√is〉)-ākāra(〈ā-√kr〉)より。

(38) サンスクリット an-eka-〈一つでない〉より。

(39) Rāmāyaṇa, III. 51. サンスクリット a-sam-bhava(〈√bhu〉)-〈共に行かない〉より。

(40) 世界言語概説, 東京, 昭和33年, 1050頁。同じく, S.T.Alisjahbana: Dari Perdjungan dan Pertumbuhan Bahasa Indonesia, Djakarta, 1957, pp. 129~.

(41) 又は amṛta と綴る。サンスクリット a-mṛta(〈√mr〉)-〈不死〉より。但し, カウイ語ではこのような metanalysis はまだあまり見られない。現代バリ語で minta merta〈或るもの(例えば食物)を求める〉。又, 現代ジャワ語の geni(Ng.)〈火〉はサンスクリットの agni-〈火〉の metanalysis による。

(42) サンスクリット sva-gata(〈√gam〉)-〈自らに話す〉より。

(43) サンスクリット sa-√jñā〈知る〉より。サンスクリットで a-√jñāは〈知らない〉の意味。sa- については後述。

(44) サンスクリットの部分は sa-a-çrī の çrī〈光輝〉。サンスクリットで a-çrī は〈光輝のない, 不幸な〉の意。

(45) I.G.K.Ranuh: Çakuntalā I, Singaradja, p. 28. 即ちこの人によると jñā は aj-ñā と音節を切るために a- を発音上から附ける。

(46) 泉井久之助: 比較言語学研究, 大阪, 昭和24年, 63頁以下。

(47) 尙, 註(43)はサンスクリット, (44)はカウイ語の例。

(48) サンスクリット sa-upa-cara(〈√car〉)-〈近づく〉より。

(49) 参照註(39)。カウイ語の sambhawa にはサンスクリットと同じ意味〈共に行く〉の他, 〈場所〉の意がある。

(50) 即ち, Jang menerangkan didepan, jang diterangkan dibelakang.〈説明するものは前に, 説明されるものは後に〉及び Jang diterangkan didepan, jang menerangkan dibelakang.〈その逆〉。

(51) サンスクリット ut-tama-janman〈高貴の生まれ〉より。

(52) Rāmāyaṇa, XV. 37. カウイ語式の sandhi を行った janma-uttama より。

例 gōng <大きな>はカウイ語。一方で *atyanta krodhanya* (<√*kru*dh<怒る>) (XV. p. 44) というサンスクリット語彙のみによる表現も見られ、この表現形式をなぞったのかも知れない。現代インドネシア語の *sangat marah* <非常に怒る>も <MD>であって *marah sekali* <同意>の <DM>とは異なるが、前者はカウイ語のこのような影響によるのであろう。

例4 サンスクリット *sarpa-viṣa-oṣadhi*-<蛇毒の薬草>

例5 サンスクリット *raja-yogya*-<王に相応する>より。

(補1) サンスクリットの *a-* は動詞の *augment* (不定過去, *aorist*, 条件法) の接頭辞としても用いられる。しかし厳密な意味での *tense* が存在しないカウイ語においてこの場合の *a-* は問題とならない。